

学校教育目標との関連

教育目標			
知	かしこく	意欲的に学ぶ子	よく考え表現する子
徳	あたたかく	仲間と共に成長する子	全ての命を大切にする子
体	つよく	健康でたくましい子	目標をもってやりぬく子 <b>重点目標</b>

児童の実態

児童が目標に向かってやりぬく力を身に付けていくためには、個性や自分の良さや考えを共有したり、安心して表出したりできる環境づくりが欠かせない。  
教育目標「つよく」の具現化に向けて、Q-Uを基に実態を調査した。

Q-U (楽しい学校生活を送るためのアンケート) 集計結果より

「Q-U」は、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」「居心地の良いクラスにするためのアンケート」という、2つの調査項目から構成されている。  
5月に実施したアンケート結果から、友達関係や学級の雰囲気項目では満足度が高い傾向にあるが、学習意欲、承認得点、侵害得点は、やや不満足を捉えている児童が2~4割いることが分かった。  
これらの項目の満足度を高めていく取組を行うことにより、児童が安心して自分の個性や考えを表現でき、目標に向かってやりぬく力の育成につながると考えた。

1 すべての授業において年間を通して取り組む授業改善の視点

~これまでの校内研究の取り組みを生かして~

(1) 問題解決的な学習 (H26年度校内研究)

児童全員が、一単位時間の授業を通して学習に対する充実感や達成感を味わうことのできる授業を目指す。そのために、児童の実態に適応する明確な課題と活動内容を設定していく。

〈具体的な実践例〉

- ・学習問題を児童自身に考えさせたり、めあてに対して必然性のある活動を取り入れたりすることで、児童主体の授業作りを実践する。
- ・単元の学習計画表や自分のノートを活用させる習慣を定着させることで、見通しをもって自ら学習に取り組んだり、既習事項を活用しながら解決したりできるようにする。
- ・学習問題を追究する段階では、ペアや小グループでの活動を取り入れることで、自分と友達の考えの相違点に気付いたり、自分の考えを深めたりすることができるようにする。
- ・一単位時間の終末には、めあてに対する振り返りの時間を確保し、自分が学習したことやできるようになったことを実感させることで、充実感や達成感を味わえるようにする。

(2) インクルーシブ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習 (H27・28年度校内研究)

全ての子供にとって「分かる・できる」「楽しい」授業を目指す。そのために、児童理解を徹底し、全体指導の中で一人一人に応じた支援をしていくことを常に意識して授業を実践していく。

〈インクルーシブの視点〉

学習意欲の向上の工夫 (学習上の困難を克服するための配慮)      自信を持たせる工夫 (心理面の配慮)

〈本校のユニバーサルデザインの定義〉

- ・焦点化…授業のねらいに合っためあてと活動を設定し、児童に思考させる視点を明確にすることで、ねらいを達成できるようにする。
- ・視覚化…資料や具体物を活用したり言葉を見える化したりすることで、確かな理解のもとで思考させられるようにする。
- ・共有化…児童同士の関わり合いを通して共通点や相違点に気付かせ、自分の考えを深められるようにする。

〈ユニバーサルデザインの手立て〉

- ・環境の工夫…落ち着いた教室環境、見やすい掲示物など
- ・活動の工夫…効果的なペア、グループ学習など
- ・教材の工夫…ヒントカード、視覚教材の効果的活用など
- ・評価の工夫…児童に対する明確な到達目標の提示、評価方法の明確化など
- ・情報伝達の工夫…構造的な板書、ハンドサインなど

2 校内研究を主軸とした授業改善推進プラン

研究主題

「問いをもち、目標に向かってやりぬく子の育成」  
~互いの良さを認め合える学級経営の在り方~

主題設定の理由

本校では、生きる力として学習指導要領に示された「未来を切り拓くために必要な資質・能力」を教育目標(つよく・かしこく・あたたかく)とし、全ての教育活動において子供の主体性を生かした学校づくりを進めている。

本年度は、昨年度までの研究成果を踏まえ、教育目標「つよく」(健康でたくましい子・目標をもってやりぬく子)を重点目標とするとともに、教育目標「つよく」の目指す子供の姿を研究主題とし、その具現化を図る。

児童一人一人が問題意識をもち、「考えたい」「伝えたい」という思いをもたせる授業を行っていくことが、教育目標である「目標に向かってやりぬく子の育成」に繋がると考え、研究主題を『問いをもち、目標に向かってやりぬく子の育成』と設定した。

研究主題に迫っていくためには、学級集団の質を高めていく必要がある。今年度は『楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U』を活用し、児童の実態として客観的傾向をつかみ、学級の状態の把握、二次的支援(予防的支援)を必要としている児童の抽出及び支援策の検討を行った。アンケート結果から、児童にとって自己が大事にされている、認められている等の自己有用感や精神的な安心感の得られる「心の居場所」として、教師や友人との心の結びつきや信頼感のある学級集団作りが課題として挙げられる。そこで、副主題を『互いの良さを認め合える学級経営の在り方』と設定した。互いに認め合える集団づくり、児童一人一人が自分の特性を理解し、どう生かすかを考えて学習に向き合える指導方法・教材の工夫を検証し、それらを生かしていくことで、『問いをもち、目標に向かってやりぬく子の育成』を目指していく。

研究仮説

問題把握の場面において、問題提示の工夫を行い、児童の気づきや見通し等の思考を共有する取組を行うことで、問いをもち、目標に向かってやりぬく児童が育つであろう。

目指す児童像

低学年	中学年	高学年
自分の考えをもち、友達のことを聞きながら学ぼうとする児童	相手の考えを受け止め、主体的に自分の考えを伝えられる児童	相手の考えを生かし、協働的に学び考えを深めようとする児童

研究内容

児童の気づきや見通し等の思考を共有するための取組として、以下の2つを中心に研究を進める。

(1) 互いの良さを認め合える学級集団づくりのための取組

《構成的グループエンカウンター》

構成的グループエンカウンターとは、集団学習体験を通して、自己発見による行動の変容と人間的な自己成長をねらい、本音と本音の交流や感情交流ができる親密な人間関係づくりを援助するための手法とされている。学習活動で取り扱う課題には、自己理解、他者理解、自己主張、自己受容、信頼体験、感受性の促進の6つをねらいとした活動があり、このねらいを達成させることで学級集団を深めていくことができる。

そこで、これらの活動を学級活動や、日頃の学級経営の中で意図的に計画的に取り入れ、互いの良さを認め合える学級集団づくりを実現させていく。

(2) 互いの良さや認め合える学級集団づくりにつながる教科指導

構成的グループエンカウンターの6つのねらいで行う活動を教科の特性と関連付け、教科学習の中で行うことが効果的である。そこで以下のことを中心に学習指導を工夫する。

《児童が動き出したくなる環境づくり》

- ・児童が呟きたくなるような導入の設定 (教材選択・問題提示の工夫)
- ・気づきの質を高めるための発問や言葉かけの工夫
- ・次時の活動につなぐ振り返りの活動と交流の場の工夫

→感受性の促進

→自己理解・信頼体験

→自己受容・自己主張・他者理解